

ふるさと（地域）に学び、ふるさとを愛する個が育つ社会科学習

～問い続ける教材の開発と学び方の研究を通して～

梶本 久子

中学年の社会科は地域学習である。身近な地域を調査、見学をして問題解決的な活動をするにより、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連について考える力を育てることがねらいとなる。その中で、ふるさと（地域）に学ぶとは、教材との出会いを地域にかかわることから見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」とのふれあいの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることだと考えている。そこで、身近な地域とのかかわりの中で見出したよさを実感し、地域との主体的なかわりをもととする子、すなわちふるさとを愛する子（個）を育てたいと考え、昨年度に引き続き、「ふるさと和歌山」にこだわった教材の開発に取り組んだ。

その結果、子どもたちは社会科の学習を通して“ふるさと（地域）を愛すること”の大切さを学んだ。本実践でも、教材との出会いを大切に、子どもたちが抱いた疑問や発見から生まれた問題を取り上げた。特に和歌山城を取り上げた単元では、身近にある和歌山城の現状に切実な願いをもち、教材と対話しながら教材に問い続け、学びを深めることができた。

キーワード：ふるさと、地域教材の開発、対話型学習、ひとり学習、学び方を学ぶ、

1. 魅力ある地域教材の開発と出合わせ方

和歌山にこだわり地域に学ぶ理由は、子どもたちが心のふるさととして、自分たちの生活する地域やまちなどを大切にする心を育てたいと考えたからだ。

また、子ども自身が地域社会の中でさまざまな実情に目を向け、そこに暮らす人々との直接的なかわりをもつ中で、学び、自らの思いや願いを表現し、問い続ける主体的な活動が、地域社会に強い愛情や誇りをもつことにつながると考えている。

地域に学ぶことの教育的意義としては、次の4点が上げられる。

- ① 子どもの生活にとって身近であることにより、直接経験による実感を伴った認識が可能である。
- ② 社会の全体的構造が捉えやすい。
- ③ ひとり学習（追究）する手段について多様性をもつことができる。
- ④ 地域社会への愛着を育成でき、地域社会の一員としての自覚を高められる。

これら4点が、地域に学ぶことの意義であり、これら条件を満たす「ふるさと和歌山発見プロジェクト」で、地域の多くの教材と出会い、「ふるさと和歌山」へ働きかけ地域を豊かに創っていくことで「問い続ける教材の開発」につながると考え、取り組んだ。

1. 1 社長の魅力あふれる会社

学習指導要領第3・4学年の内容(3)「地域の人々の生活にとって必要な飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理について、見学、調査したり資料を活用したりして調べ、これらの対策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上

に役立っていることを考えるようにする」に基づき、廃棄物の処理施設として「M商店」を取り上げた。

しかし、「M商店」を取り上げたのは、数多くある廃棄物の処理施設の1つというより、M商店の社長のこだわりや子どもたちに託す未来の和歌山への思いなど、際立った特色をもって地域貢献をしている会社だからである。「M商店」の特色やよさへの理解に基づいて、自分たちの住んでいる地域社会に対する誇りと愛情を育てていきたいと考えたのである。社長からは「調べ学習を頑張っている4年C組に特別に子ども向けのパンフレットを作ってもらいたい」という話をしてもらい、子どもたちのモチベーションをあげる教材の出合わせ方をした。そのことにより、自分たちの調べ学習や話し合いの結果が直接伝わるという思いを持ち、より「M商店」に親近感、共感をもつことにつながった。「和歌山の小学生にみてもらうキッズパンフレットをつくる」という思いで取り組むことで、自分の生活を振り返り、これからの生活に生かしていこうとする意識が育つのではないかと考えた。また、社会生活にごみの廃棄を通してどのように参加すればよいのかという自分の生活を考える姿勢も育つと考えた。

1. 2 教材の持つ力強さ「和歌山城」

学習指導要領第3・4学年の内容(6)のウ、県内の特色ある地域の人々の生活、内容(5)「地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする」に基づいており、イ、地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事ともリンクしている。和歌山県の宝物（おススメ）さが

しをし、その中で和歌山のシンボルで宝物である「和歌山城」を取り上げた。和歌山城を学習するにあたって、出合わせ方としては和歌山市長にお願いをして「4年C組」にあてた和歌山城に対する熱い思いと一緒に学習していこうといった主旨の手紙を書いていただいた。単元の終末に、市長への提案書作成、大学生とのコラボであるカフェで和歌山市民にプレゼンをすることによって、相手意識を持つだけでなく、自分たちの思いが直接伝わり、何か実現するのではないかという夢や期待をもって学習を進めることができるのではないかと、また、そのことにより、さらに和歌山城に親近感をもつのではないかと考えた。子どもたちは「最終的には市長さんに提案しなければ」「4Cが和歌山城を何とかするんだ!」「パンフレットに思いを残そう!」という切実な思いを出すことができた。そして、毎日のように訪れ、聞き取りするなかで「和歌山城」に対し、子どもたちは大きな愛着と誇りを感じていた。実際、休みの日や放課後の調べ学習も積極的に取り組んでいる子どもが増え、子どもたちの和歌山城に対する熱い思いが多く場面で見られた。

1. 3 紀州漆器

学習指導要領第3・4学年の内容(6)「県の様子について、次のことを資料を活用したり白地図にまとめたりして調べ、県の特徴を考えるようにする」のウ、県内の特色ある地域の人々の生活に基づいて、海南市黒江地区の伝統工業「紀州漆器」を取り上げた。「紀州漆器」は熟練した技術をもつ職人が一つ一つ手作りで作り上げるものであり、そこに紀州漆器ならではのよさがある。そこで、紀州漆器づくりの歴史やその発展に尽くしてきた人々の働きや現在紀州漆器づくりに携わっている人々の働きについて調べることを通して、紀州漆器が地域の自然や社会的条件を生かした、特色ある産業であることを理解すると考えた。また、地域ぐるみで紀州漆器を広めようとしている人々の様々な思いに触れる中で、伝統を守っていくことの大切さやふるさと和歌山の誇りであることに気づくであろうと考えた。そこで、2学期学習した和歌山城にある身近な和歌山市観光土産センターに行き、漆器のコーナーや工芸品を見せ、職員の方から「漆器が売れない」という話をしてもらった。身近に感じることのなかった漆器が頻繁に通った土産センターでの問題となって、その出会いに驚き、漆器を見つめるきっかけになった。

2. 学び方の研究

2. 1 1年を見直し、学び方を学ぶ

4年生の調べ学習では、社会的事象を作業的・体験的な学習や問題解決学習等を通して、感じたことを中心になるべく具体的な「もの・こと」を大切に、学び方を身に付けるような学習の工夫を考えた。「学び方を学ぶ」ために、発表、インタビュー、

調べ方ガイドブックなど、4年生の発達段階にそった学び方カードを中心に細かく指導していった。

和歌山城の単元では、実際に数多くの観光客にインタビューし「足で稼いだ」調べ学習を学ばせた。

同じ和歌山城を見ながら、「自分たち」と「観光客」の目線で取り上げ、対比して学習をすすめた。両者に和歌山城に対する思いの大きなズレがあり、驚きと興味をもって教材と対話しながら進め、和歌山城をより自分に引き寄せて考えることができたようであった。そのことで、こだわりのある意見が生まれ、伝えたい気持ちも高まり「ひとり学習」が充実していった。また「学び方を学ぶ」ということは、教科書や地図帳・資料集・インタビュー活動等を活用し情報収集する技能、表現する技能・話し合う技能などを高めることはもちろん、多面的・多角的に思考・判断するといった問題を解決していく筋道や思考の方法を学ばせていく「プロセス」を学ぶことでもあると考えている。こういった「学び方」が、生きる力となり、生涯にわたって学び続けるための基礎を培うことになると考える。

2. 2 地域の人との出会い

地域の人と直接触れ合うことにより、出会った多くの方々が、学習を高めてくれる貴重な指導者になってくれる。そのことが子どもたちにとって、大きなエネルギーになる。こういった出会いの一つひとつが、人々の願いや工夫を知るきっかけになり、その思いに応えようと子どもたちも、追究姿勢に深まりが出て、学び合うことができる。

四季を通して多くの地域の方へのインタビューや、和歌山県庁、市役所、NPO、語り部の方などの和歌山城と関わる方々の数多く聞き取り調査から、自然環境、伝統や文化などとの関連や願いを実現していく地域の人々の工夫や努力について考える力を育てていきたいと考えた。

社会科において「学びの質の高まり」とは、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことだと考える。しかし、ひとり学習では調べるだけで満足する子どもも多く、考察までできる子どもは少ない。年間を通して、地域素材の活用や生の声を聞き取る活動を大切に、子どもたちが自分とのかかわりから事象がとらえられるようにすることで、自分の考えをより深めることができる。そのことにより、さらに、ひとり学習の課題の必然性が明確になり、意欲的に調べ活動ができるようになって考えている。また、意欲的に追究し、自分で問題を発見し、問題解決の過程でいきいきと学び合うことで、自分を見つめなおし、未来への生き方へとつなげていける子にさせたい。地域の方に学ぶことにより、人々との共感、心をつなぐことが学び方を学ぶことにもつながったと感じた。

2. 3 表現活動・発信の場の工夫

子どもの考えは表現することによって表出され、目に見える形となる。そうした表現方法や発信の場の充実や工夫が大切であると考えている。そして、子どもが自分だけでは思いつかなかった見方や考え方を発見できることが社会科の「考える面白さ」なのである。

・目的意識を持たせて

学習の発信の場として、1年を通して和歌山市の小学生への「キッズパンフレット作り」や和歌山市長への提案書作り、海南市役所への企画書作りなどに取り組んだ。また、「より多くの小学生、観光客に見てもらおうキッズパンフレットを作る」という思いで取り組むことで、ひとり学習の必要性、目的意識や相手意識、切実感をもって取り組むことができるのではないかと考えた。また、自分たちの調べ学習や話し合いの結果が直接伝わるといふ思いを持ち、さらに、教材に親近感、共感をもつのではないかと考えた。

・体験を経験に高める

地元企業や大学生とのコラボレーションのカフェ事業、さらに子どもたち自身が地域素材をもとに企画運営するカフェなどを中心に「ふるさと和歌山発見プロジェクト」の取り組みを発信した。和歌山城のジオラマを用いたプレゼンテーション、和歌山城の自然素材を用いた工作やクイズ、劇などのワークショップ活動などさまざまな表現活動を行った。

また総合的な学習とリンクして、和歌山県庁、コンビニエンスストア、地元和菓子店との共同開発(地産地消の果物を使ったお菓子・わかやまポンチ、ふるさと和歌山まんじゅう)やコンビニエンスストアの子ども店長などの体験学習も行った。

繰り返し、多くの場や人の前でプレゼンテーション活動を行うことによって、表現力の向上等、子どもたちの大きな変容が見られた。また、社会科・総合的な学習を通して地域の未来に対する強い思いを校内外の多くの人に発信することができた。また、保護者・地域住民対象のアンケートの結果、保護者からは、地域の多くの方々が、子どもたちの学習を高めしてくれる貴重な指導者になってくれたことへの感謝の言葉やふるさと和歌山のよさを再発見したという意見ももらった。また、地域住民からは子どもたちの強い思いがふるさと和歌山に誇りを持つという啓発につながった意見も多く寄せられた。このように体験を経験へと高めるためには、体験後の指導が重要である。表現活動を組み入れて体験を振り返り、そこで感じ、考えたことを対話型学習で深めていく。そういった振り返りの場を充実させることにより体験を対象化し、それを経験へと高めていくことができると考えている。

3. 授業実践 (和歌山城たからものさがし)

3. 1. 単元目標

- ・和歌山城における問題点についての問題意識をもつとともに、和歌山城の具体的な見学・調査を通して、問題の解決に向けて自分なりの考えをもつ。
- ・資料を収集・活用したり、まとめたりする作業を通して、和歌山県を調べ、自分たちの県の特徴やよさについて具体的に考える。

3. 2. 「地域に学ぶ」ことのよさ

本単元では地域に学ぶよさ(魅力的な教材、効果的な出会い)をいかせた場面が多くあった。A児の作文を中心に3例挙げる。

・市長からの手紙

和歌山市長にお願いをしていた「子どもたちへのメッセージ」が市長からの手紙という形で実現した。「4Cのみなさん!もっと調べて私に教えてください」という言葉に感激し、和歌山城に対する市長の思いに驚き、共感していた。これから調べる和歌山城に思いを馳せ、期待に胸を膨らませていた。

がんばる!絶対がんばる!

僕にとって、そして4Cにとって大きなニュースがあった。和歌山城は大切な問題だ。市長さんが見ていてくれるというのも嬉しいことだし、そのためにたくさん研究して報告するというのを考えると、わくわくしています。頑張らなければいけない大きなことだ。(A児)

・とことんインタビュー大作戦

4月は、調べ学習になるとどうしていいのかわからなくなる子もいた。調べ学習に慣れてくるにしたがって、インタビュー、アンケート、ゲストティーチャーからの話などいろいろな方法で学習を進め意欲的に調べ学習をする子が増えてきた。本単元では、観光客の聞き取りが中心ではあるが、市役所や多くの人のかわりなどを通して、和歌山城を管理している地方公共団体の仕組みや役割、和歌山城にかかわる人の思いについても気付くことができた。

ハテナが増えてきた!

天守閣の入場料は、建て直すための貯金だという僕の考えが本当だったのでうれしかった。でも、今のぼくには根拠がないからみんなの意見に言い負けることもある。もっと調べ学習をして、みんなを驚かしてみせる。それに、いろんな人が和歌山城を考えているのも知ることができてびっくりした。市長さんだけでなく多くの人が見ていてくれるというのもうれしいことだし、そのために、これからはもっとたくさん調べて発信するというのを考えると、それもうれしくて楽しみです。(A児)

・新聞記事から

朝の会のニュースで「一度は訪ねたいお城ランキング」という新聞の切り抜きを紹介した子がいた。毎日のように訪れ、聞き取りする中でどんどん愛着と誇りを感じている「和歌山城」が20位以内に入っていない事実に驚き、ショックを受けていた。しかし、和歌山城

をランクインさせたいという思いは子どもたちの心に深く入っていったようで、その後、休みの日やイベント、放課後などでも積極的に和歌山城に行き、インタビューする子が急増した。

問題だ！

何ていうことだ・・・和歌山城ほどのお城がランクインしていないなんて。きっとこれは、和歌山城のよさを知らないんだと思う。連立式の天守閣だし、岡口門も重要文化財。何とかしなければいけない。まずは、木造にしてほしい。その方がお客さんもくる。点字ブロックも必要。20位以内のお城は木造が多いので、人気になるんじゃないかな？前に調べたら、木造で江戸時代のままに復元しようという動きもあった。お年寄りのために階段のところをエレベーターにする。本当に何とかしなきゃ！と本気で思った。(A児)

4. 単元の考察

4. 1 対話型学習の中で

意見交換の際、大きく分けてハード面を大切に考えている子とソフト面を大切に考えている子がいた。ひとり学習では、初めはハード面に目を向ける子が多数見られた。しかし、課題に深く向き合い、調べ学習をすすめていく中で「自分たちができることは何だろう？」「市長に提案するためにはどうしたらいいか」「他府県の人に来てもらうことより、和歌山の人にきちんと和歌山城のことわかってもらうことが先じゃないか」という思いを持つ子が出てきた。この子たちの思いがクラス全体に伝わる場面で学びの質の高まりがあると考えた。そこでS君の意見「たくさんの人と会って和歌山城がすごく好きになって、今までの何も感じない気持ちが変わりました。市長さんの手紙に書いてた『行けばいくほど好きになる』っていうのがわかります。借金が20億もある和歌山市だから、まず4Cから、そして、和歌山市、県の人に伝えて好きになってもらうこと、つまり、身近なことからコツコツしていくことで今すぐじゃなくてもランクインすると思います」という考えを全体に戻し、話し合った。そこで、「木造がいいと思っていたけど、とにかくお金をかけないで工夫していくことが大切だと思った。」「自分たちでできることを考えなくちゃ」「1番大切なことは4Cが頑張ること！4Cポンチみたいに夢が実現すると思う」など、子どもたちの考えの容容や深まりもみられ、焦点化され吟味がうまれたと思う。ひとり学習の時間を十分保障した分、自分の考えの出したい思いが先行しがちなところも見られた。それだけでは、新たな発想や思考を創造し、学び合いの質を高めることにはなり得ない。互いの考えをしっかりと受け止め、自分の考え方と比較しながら思考を重ね、自らの考えをさらに深めて表現しあうことによって、新しい価値が生み出されると考えている。そのためにも、

教師の「問い直し」や「ゆさぶり」など多くのみとりや支援を大切にしていきたい。

4. 2 ひとり学習を中心に

子どもたちのひとり学習での成果が、多くの子の根拠ある発言へとつながった。和歌山城を何度も訪ねた結果であると感じた。また、そういった活動の中で、人々の思いや願いに気づくことができ、和歌山城に対する熱い思いの発言へとつながった。

5. 成果と課題

僕は和歌山城の勉強をして、今までは運動場やバスの中で見ても何にも感じなかったし、岡公園へ行く方が好きだった。でも、NPOの川島さん、有本さん、語り部の山本さん、市長さんなど、みんなが和歌山城が大好きで、和歌山城の魅力を大切にしているってわかった。それに観光客の人100人以上に聞いたりして、本当にいつも和歌山城に行ってたから、むちゃくちゃ和歌山城が好きになった。でも、和歌山市の人はあまり和歌山城のよさを知らないし、宝物って思っていない。だから、自分たちで和歌山城のいい所をいっぱいPRして、4Cポンチみたいに夢が実現するのいいと思った。大人の人に任せるより、まず自分たちで動いてみなくちゃいけない！今は和歌山城のことが大好きだし、自慢に思うし、そんな和歌山のことも好きになった。(B児の作文より)

地域学習には、それぞれの社会事象の関連付けや、社会認識を大きく変化させるような様々な意義がある。特に、和歌山城の未来について考える学習は、地域の将来を考えることにより、地域を愛する個を育てるという地域学習の大きな意義をも含んでいると考える。4年生として、木造への建て直しなど、市の予算等まで考えるのは難しい点も多くあると思うが、既存概念にとらわれない子どもたちの柔らかな感性で、将来を考えることは、和歌山城の学習だけにかかわらず、今後、学習していくうえでひとり学習を意欲的に進めていくことにつながると考えた。

そして、子どもたちは社会科の学習を通して“ふるさと和歌山を愛すること”の大切さを学んだ。学習が終わった今でも、子どもたちの和歌山城に対する思いは強く、総合的な学習として、その学習を継続している。これからも、和歌山城の未来を大切に考え、自ら行動する態度が育っていくことを願っている。社会科の学習で学んだことを生かして、地道に和歌山城や地域を愛する輪をひろげ、つづき、ふかめていくことができると考えている。

参考文献

- 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」
- 安野功(2006)「社会科授業力向上5つの戦略」東洋館出版社
- (2010)和歌山大学教育学部附属小学校校紀要 No. 34